

[教育実践報告]

# 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習 における教育方法についての報告 ～在宅看護実習での学生アンケート結果から～

山 口 裕 子      村 瀬 美 香      松 本 佳 代  
緒 方 直 子      田 中 清 美

A report on educational methods in on-campus training using videos due to reduction  
in the on-site nursing practical training time:  
Analysis of students' responses to questionnaire in home care nursing practical training

Yuko YAMAGUCHI, Mika MURASE, Kayo MATSUMOTO  
Naoko OGATA, Kiyomi TANAKA

## 【和文抄録】

新型コロナウイルスの感染拡大により看護の臨地実習時間が短縮されることとなった。このような状況の下、在宅看護の視点の獲得を目指して、訪問看護事例の動画を用いた遠隔および対面の学内実習を本学看護学科3年生111名に行った。そこで、動画を用いた教育方法の効果と課題を学生アンケートの記述から明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。その結果、9割以上が臨地実習のイメージトレーニングに少しでも役に立ったと答えている。その理由として、共通の動画を用いて情報共有することによりイメージがしやすく身体・心理・社会的側面を捉えやすかったため、対象の理解が進んだことが挙げられる。また、グループワークを通して生活や環境をふまえた総合的なアセスメントとその支援についての意見を共有し、学生間で気付き合えたことで、在宅看護の視点について学びが深まったと考えられる。課題として、学生がタイムリーに質問ができる方法や学生の進捗状況に合わせた対応、動画事例に不足する情報の提示や学生の通信環境に応じた個別対応等が挙げられた。

キーワード：在宅看護，動画，遠隔，学内実習，教育方法

## I はじめに

令和2年1月にWHOが新型コロナウイルス感染症を確認し、国際的な緊急事態を宣言して以降、今も感染者は増え続けている。日本においても密閉・密集・密接を避ける行動をとるように厚生労働省より注意喚起がなされたが感染拡大を抑えることができず、4月には全都道府県が緊急事態措置の対象と

された。これに伴い、文部科学省と厚生労働省より新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校の対応について、「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実情を踏まえ実習に代えて演習または学内実習等を実施することに

より、必要な知識および技能を修得することとして差し支えないこと。」<sup>1)</sup>とする事務連絡があった。また、文部科学省高等教育局長より「大学等における新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止措置の実施に際して留意いただきたい事項等について」<sup>2)</sup>の通達が出され、臨時休業や学校運営上の工夫、遠隔授業の活用等が示された。

これらを前提に、看護学科として臨地実習について検討を重ねた結果、実習開始時期の延期と臨地での実習を45時間とすることが決まり、在宅看護実習は学内実習(45時間)の後に臨地での実習を組み合わせ、90時間の実習とすることとなった。

真嶋<sup>3)</sup>によると、実践場面の減少や対象者をイメージ化することが困難な学生にとって、情報通信技術(Information and Communication Technology, 以下 ICT と略す)は疑似体験や自己学習を支援するシステムとして効果的であることが明らかになっている。そこで、臨地での実習時間が例年より短くなることを補う方法として ICT を利用する実習を組み入れることにした。在宅看護実習では臨地での実習の前に行われる45時間の学内実習時間に、臨地での体験に近い訪問看護事例を用いた動画の遠隔視聴を行って、施設外の看護経験のない学生が訪問看護場面をイメージでき、訪問までの準備学習の必要性や訪問中の家族や環境をふまえた総合的なアセスメントと実際の支援、訪問後の多職種との連携について疑似体験をすることで、実習目標への到達を目指した。

この教育実践報告では、臨地での実習時間が短縮されても、疾患や障害の状態と家族や生活環境などを関連させながら生活上のリスクを予測し、地域の多様な支援職と連携をとってケアを行っていく在宅看護の視点の獲得を目指して、今回の動画を用いた遠隔での学習と対面でのグループワークという教育方法の効果と課題を学生アンケートの記述から明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 用語の定義

本稿では、以下の意味で用語を用いることとする。

- 1) 臨地実習：主に訪問看護ステーション等の実習施設を中心に行う実習(同行訪問等)
- 2) 学内実習：遠隔学習(自宅等で個人で行う動画の視聴、実習記録の作成等)と対面学習(学内

で行うグループワーク、教員からの対面指導等)

## Ⅲ 方法

### 1. 対象

令和2年度に在宅看護実習を履修した看護学科3年次生111名。

### 2. 調査方法

在宅看護実習時間90時間のうち、前半45時間は学内実習を行い、後半の45時間は臨地実習を行う予定とした。そのため、前半45時間の在宅看護の学内実習最終日に、調査の目的や方法、成績とは無関係であることを説明し、無記名で回収箱に入れる形式で紙面によるアンケート調査を実施した。また、アンケート調査は任意であり、アンケート調査用紙提出により同意を得たものとした。実施日は令和2年7月28日、回収箱設置は当日のみとした。

### 3. アンケート調査内容

- 1) 動画での事例を活用した実習について、(1) 臨地実習での同行訪問に向けたイメージトレーニングへの有効性について(4件法)と、(2) よかったこと、学べたこと(自由記述)、(3) 学習を進めていくうえで困難だったこと(自由記述)。
- 2) 在宅看護実習の学内実習のスケジュールや学習内容について、(1) 良かった点(自由記述)、(2) 改善してほしい点(自由記述)、である。

### 4. 分析方法

分析対象となった記述をデータとして抽出し、同じ意味・内容を示すものについて類似性をもとに分類した。なお、分類にあたっては、共同研究者5名で検討を行った。

### 5. 実習期間および内容

#### 1) 実習期間

2020年5月26日～2020年7月28日(毎週、4～6時間の学内実習を実施)

#### 2) 実習内容

在宅看護実習目標(表1)の到達に向け、昨年までは在宅看護実習時間90時間のうち、臨地実習を75時間、学内実習を15時間実施していた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止に対応し、在宅看護実習目標は変更せず、実習形態を変更した。前半45時間は学内実習を実施し、後半45時間は臨地実習16時間、学内実習29時間を行う予定とした。

(1) 動画教材の選定と追加資料について

教材は、実習と同様の訪問看護ステーションの訪問看護事例をテーマとした動画2事例（事例①：人

工股関節置換術後療養者の退院前カンファレンスおよび初回訪問看護、事例②：終末期にある肺がん療養者・家族のサービス担当者会議および訪問看護）

表 1. 在宅看護実習 到達目標

GIO(一般目標)				
地域の中の居宅及びそれに準じる場所で、健康障害をもちながら生活する人びとやその家族の、健康上の課題および生活の継続について理解する。さらに対象となる人々の主体性及び価値観を尊重する根拠に基づいたケアについて学ぶ。また、在宅療養を支える地域包括ケアシステムと相補的自律性のあるケアチームの連携、その中での看護の機能と役割について理解する。				
到達度 SBO (個別到達目標)	助言・指導を複数のケースに活かして、自ら学びを発展させることができる(5点)	助言・指導を受けて、複数のケースについて理解することができる(4点)	助言・指導を受けて、1つのケースについては理解することができる(3点)	多くの指導を受けても理解が不足している(2点) 理解することができない(1点)
<b>1. 在宅療養者と家族の生活の全体像を理解できる。</b>				
1) 発達段階をふまえ、療養者と家族の健康障害と心身の状態について説明できる。				
2) 療養者と家族のこれまでの生活歴をふまえた上で現在の生活状況について述べるができる。				
3) 療養者と家族が、病気や現在の生活をどのように理解しているか述べるができる。				
4) 家庭内や居住地域の環境と、療養者とそこに暮らす人々との関係について述べるができる。				
5) 療養者と家族の価値観、在宅生活への希望について述べるができる。				
6) 療養者と家族の強みに着目することができる。				
<b>2. 療養者と家族の健康上・生活上の課題と、根拠に基づいた支援の内容について理解できる。</b>				
1) 療養者と家族のセルフケア能力について説明できる。				
2) 療養者と家族の健康上・生活上の課題について説明できる。				
3) 看護目標が、療養者と家族の生活の質の維持・向上を目指していることを説明できる。				
4) 療養者と家族に対して実施されるケアが、対象の主体性及び価値観を尊重し、セルフケア能力を高めるように工夫されていることが説明できる。				
5) 次回訪問までのリスクを予測して、予防的に行われているケアや連携の実践について述べるができる。				
<b>3. 地域包括ケアシステムの中で行われる関係機関・関係職種との連携を知り、その中での看護の機能と役割を述べるができる。</b>				
1) ケースごとの訪問看護が行われている保険制度と、訪問看護師の役割について説明できる。				
2) 療養者と家族が受けているフォーマル、インフォーマルなサポートについて経済面（費用）や価値観との関連にも着目しながら述べるができる。				
3) 療養者と家族が利用するサービス機関や関係職種との連携の実践とその目的について述べるができる。				
4) 在宅ケアチームにおける訪問看護の役割について記述することができる。				
到達度 I.実習目標	主体的にできる (5点)	少しの助言を受けてできる (4点)	指導を受けておおむねできる (3点)	指導を受けても不十分である(2点) 指導を受けてもできない(1点)
<b>4. 看護学生としての基本的な態度をとることができる。</b>				
1) 報告・連絡・相談をおこない、実習生として責任ある行動がとれる。				
2) 自己の学習課題を明確にしたうえで事前学習や事後学習をおこない、主体的に学習できる。				
3) 記録物は期日までに提出し、その後の指導を受けて追加や修正をタイムリーに行うことができる。				
4) 他者の尊厳を尊重した適切な言動をとることができる。				
5) 知識と実習体験を関連させて、自己の学びと課題を具体的に表現できる。				



を使用した。この教材は、ID / パスワード認証システムにより学生が自宅等において各自のパソコンやスマートフォンにて動画を視聴することが可能である。カンファレンスや会議、訪問看護の場面に加えて、実施されているケアや話し合われている内容について学生が個人学習でも理解が深められるよう、解説が加えられている動画教材を選定した。また、教員が動画を確認し、動画のみでは実習目標到達に向けて不足すると考えられた情報を「基本情報」「訪問看護指示書」「居宅サービス計画書」「週間サービス計画表」に組み込み追加資料を作成した。

## (2) 学習の流れ

### ①実習スケジュール

在宅看護実習時間90時間のうち、前半45時間は学内実習を行った(表2)。後半の45時間は臨地実習を行う予定とした。

### ②学習の進め方

臨地での実習に近い形で進められるように、教員が作成した「基本情報」「訪問看護指示書」「居宅サービス計画書」「週間サービス計画表」で情報収集しながら、動画視聴により訪問看護に同行したと想定し同行訪問の記録を作成するとともに、次回訪問時のケア計画を立案し、ケースに関する記録をまとめた。実施方法として、自宅等で動画を視聴して作成した記録用紙を学内実習に持参してグループワークおよび教員による解説を行った。

## (3) 指導上の留意点

新型コロナウイルス感染予防対策のために大学への登校日をできるだけ少なくした。グループは、在宅看護実習の事前学習や遠隔学習で提出された記録物の記載内容を読み、個人学習の進捗状況を考慮して、グループによって学生の目標到達度に偏りがないように配置し、4～5名で編成した。

遠隔学習でも学生が実習到達目標を意識して取り組めるように、本学のWebシステムを用いて、実習到達目標に沿った各回の学習目標を提示するとともに、学生からの質問は本学のWebシステムへ提出された内容を確認し、学生全員へ向けてWeb上で回答した。また、学生が初めて記載する実習記録には、ガイドとなるようなモデル用紙を配付した(表3)。

## 6. 倫理的配慮

学生へ紙面および口頭にて、アンケート調査は実習内容の評価を目的としたものであり匿名であるこ

と、成績評価には影響しないことを伝え、協力を得た。なお、本研究は教育評価を目的としているため、倫理審査の必要がない旨の回答を本学ライフサイエンス倫理審査委員会から得ている。

## Ⅳ 結果

アンケート調査では、学生111名中109名から回答を得た。以下に、アンケート項目に沿って結果を記す。学生の自由記述の内容を「」で示し、自由記述を意味の類似性に沿って分類した項目を【】で示す。

### 1. 動画での事例を活用した実習(表4)

1) 臨地実習での同行訪問に向けたイメージトレーニングへの有効性について

“役に立った”66名(60.6%)、“少し役に立った”42名(38.5%)、“あまり役に立たなかった”1名(0.9%)、“役に立たなかった”0名であった。

2) 動画での事例を活用した実習でよかったこと、学べたこと

学生から最も多く挙げられていたのは【動画の内容から訪問看護の実践がイメージできた】であり94の回答があった。内容として「在宅看護での観察の視点(病状の観察点、環境の観察点、家族のアセスメントも重要であること等)」「在宅での生活がどのように行われているか、看護師はどんなところに着目して関わっているのか学べた」「次回訪問で観察すべき項目、次回訪問までのリスクの考え方など」などがあった。次いで多かったものは【動画の解説が分かりやすく効果的だった】で18の回答があり、「映像を見ながらでイメージしやすく、解説がついて自分とは違った考えも学べて視野が広がった」「在宅看護ならではの視点やアセスメントをあらかじめ知ることができた」「動画にアセスメントやケアのポイントが説明されていて、理解しやすかった」などがあった。また、【動画を自分のペースで視聴できた】は10の回答があり「動画は何度も繰り返し見ることができたので、自分でわからないところをより深めることができた」「看護師が行っている看護について動画を止めながら記録に整理することができた」などがあった。その他には【ペーパーペイシエントよりわかりやすい】は3の回答が、【実習では体験する機会が少ないことも平等に学べた】は2の回答があった。

表2. 在宅看護実習 学内実習スケジュールおよび内容の概要

(遠隔 16 コマ, 対面 7 コマ)

コマ	月日	実習形態	内容	実習内容に関連するSBO(個別到達目標)
1	5/26	遠隔	在宅看護実習の目標, 実習形態, 評価方法の説明	1-1) 2) 3) 4) 5)
2			在宅看護過程展開の復習, 事例①紹介・情報の補足 「基本情報」「訪問看護指示書」「居宅サービス計画書」「週間サービス計画表」配布【課題: 事例①の疾患について学習】	
3	6/2	遠隔	事例①日々録(訪問看護実践場面, 療養者の病状の観察や家族状況, 家屋の状況, ケアの実施などを記録し, そのアセスメントの結果やケアの根拠について考察する)の作成	1-1) 2) 3) 4) 5) 6) 2-1) 2)
4				
5	6/9	遠隔	事例①看護関連図(療養者の疾患の経過, 病態の変化を含めた全体像を示し, 健康上・生活上の課題と根拠に基づいた支援の内容を図式化する)の作成	1-1) 2) 3) 4) 6) 2-1) 2) 3) 4) 5)
6				
7	6/16	遠隔	事例①療養環境関連図(療養者の望む生活を書きだし, 療養者の望む生活を支えるフォーマルサービス, インフォーマルサービスについて各々の連携を図式化する)の作成	1-5) 3-1) 2)
8				
9	6/23	対面	事例①退院前カンファレンス, 事例②担当者会議の視聴 多職種との連携用紙(連携場面の実際から連携の目的や内容を記載し考察する)の作成	2-5) 3-1) 2) 3)
10				
11	6/30	対面	事例①看護関連図・療養環境関連図の修正(グループワーク, 全体発表)	1-1) 2) 3) 4) 5) 6) 2-1) 2) 3) 4) 5)
12				
13			事例①について次回訪問計画の作成(グループワーク, 全体発表)	3-1) 2) 3)
14	7/7	遠隔	事例①看護関連図・療養環境関連図の修正 次回訪問計画の作成	1-1) 2) 3) 4) 5) 6) 2-1) 2) 3) 4) 5) 3-1) 2) 3)
15				
16	7/14	対面	3グループに分かれグループ発表(次回訪問計画について)	2-1) 2) 3) 4) 5)
17		遠隔	発表グループ以外は遠隔	
18			事例②を視聴し日々録の作成	
19	7/21	遠隔	事例①ケース記録Ⅳ(療養者と家族の生活の全体像および健康上・生活上の課題と根拠に基づいた支援の内容, 関係機関・関係職種との連携とその中での看護の機能と役割について文章化する)の作成	1-1) 2) 3) 4) 5) 6) 2-1) 2) 3) 4) 5) 3-1) 2) 3) 4)
20				
21	7/28	対面	3グループに分かれグループ発表(事例①ケース記録Ⅳについて)	1-1) 2) 3) 4) 5) 6) 2-1) 2) 3) 4) 5) 3-1) 2) 3) 4)
22		遠隔	発表グループ以外は遠隔	
23			厚生労働省の感染予防動画を視聴しレポート作成, 中間評価の実施と個々の課題の明確化	

## 3) 学習を進めていくうえで困難だったこと

最も多かったものは【タイムリーな質問ができなかった】であり、23の回答があった。内容として「一人で学習を進めていて、分からないことがあったとき先生にすぐ聞くことができない」や「記録の書き方が適切か悩んだことがあった」などがあった。次に【事例の情報提供には限界がある】と13の回答があり、「家の構造など利用者を取り巻く環境についての把握が難しかった」「動画ではどうしても見えない部分や情報が足りない部分があった」などがあった。また【通信量や手間がかかる】と4の回答があり「Wi-Fiの環境がないと厳しい」「(動画を視聴するために)何回もログインする必要があった」などとあった。その他には「実際に自分で援助を行っていないこと、動画事例で問題点が分かりやすかったことから、(臨地実習で)実践できるか不安がある」などの回答もあった。

## 2. 学内実習のスケジュールや学習内容について (表5)

## 1) 良かった点

最も多かったものは【グループワークでの学びが深まった】であり、50の回答があった。内容として「グループワークで自分にはなかった視点を共有することができた、学びを深めることができた」「様々な考えを共有し、新たなアセスメントや看護問題について考えることができて良かった」などがあった。次に多かったものは【課題の量や内容、スケジュールの組み合わせが適切だった】で24の回答があり、「課題のペースと指導の間隔がちょうどよかった」「自宅学習の量が適切で、1つ1つの内容について学内で学習できたため分かりやすかった」などがあった。その他、【教員の説明、対応で学習が進められた】が7、【動画を取り入れたこと】が6、【実習記録用紙の活用により後半実習が進めやすくなる】が3、【感染予防対策ができていた】で3の回答があった。

## 2) 改善してほしい点

最も多かったものは【課題の量や内容、スケジュール】であり、17の回答があった。内容として

表3. モデル用紙例

実習日誌Ⅰ(日々録)

平成 年 月 日 ( )		学生番号		学生氏名	
実習 日目		同行訪問した指導者:			
本日の実習目標 SBO(個別到達目標)を参考に、GIO(一般目標)が達成できるような訪問ケースごとの目標。主語は学生でよい					
行動計画・情報	観察・留意点	実習内容 (実施したことや対象の反応など)		評価・考察	
訪問予定時刻 訪問所要時間 年齢・性別・疾患 家族の有無、居住環境 日常生活自立度 要介護度 訪問看護の保険制度 訪問看護の利用頻度 他の利用しているサービス 医療機器の使用など 医師の指示事項  療養者や家族の希望 訪問看護の目的 本日のケア計画  (訪問看護指示書、 訪問看護計画書、 訪問看護報告書、 訪問看護記録、 居宅サービス計画書から 情報を得る)	左記の情報から 考えられる必要な観察項目 や留意点  ・疾患や治療に関して必要な観察 項目と予測されるリスク  ・疾患や治療が生活に及ぼす影響 の予測と日常生活上の留意点  ・最近のバイタルサインや ケアを行う際の留意点  ・生活環境・家族の介護力の 観察ポイント  など	左記の観察・留意点をふまえて、体験したことや観察した結果 (事実)を書く  ・状態観察(バイタルサイン値、症状など) ・療養者や家族の表情や言動 ・居宅や室内の様子、福祉用具、医療機器の管理についてなど ・指導者(Ns)が行ったケアの優先度、手順、療養者や家族への 説明など ・連携の内容(何について、誰と、どのような方法で) ・学生が行ったこと(ケアの中で)  など		療養者・家族・環境等を観察した結果から 学生は現在の状態をどう判断したのか  次回の訪問までに予測される状態やリスクを考え、 行われたケアや連携の根拠を考察する  文献や教科書を用いて根拠ある考察にする  * 生活する上での『強み』にも着目すること * SBOのキーワードに着目しながら考察  本日の実習目標の達成状況についても考察する	
カンファレンスのテーマ ( ) 学び		指導者の 助言	学生記入欄: 指導者からの助言を青字で学生が記入		指導者記入欄: 臨地の指導者が記入

「同時期の事例2つは難しい」「1つの事例に多くの時間を使って深く考察するのはとてもいいが、もう少し圧縮して行っても問題ないと思う」「学内グループの授業で説明があってから日々録やケース記録Ⅳを書いたほうが書きやすかった」「1コマだけ

のために学内に来るのが大変だった」などがあった。次いで多かったものは【感染予防対策】で12の回答があり、「感染リスクを考えるとできるだけ学内に来ない方がいいと思った」「グループワークは意見の共有のためにはいいが、もう少し少なくてもいい

表4. 動画での事例を活用した実習に対する学生の意見

### 1. 臨地実習での同行訪問に向けたイメージトレーニングへの有効性について

	役に立った	少し役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった
n=109	66名 (60.5%)	42名 (38.5%)	1名 (1%)	0名 (0%)

### 2. 動画での事例を活用した実習でよかったこと、学べたこと

分類 ( ) 内は記載数を示す	学生の記述内容
動画の内容から訪問看護の実際がイメージできた (94)	在宅看護での観察の視点(病状の観察点、環境の観察点、家族のアセスメントも重要であること等) 在宅での生活がどのように行われているか、看護師はどんなところに着目して関わっているのか学べた 次回訪問で観察すべき項目、次回訪問までのリスクの考え方など 療養者や家族への接し方、利用者の強みを生かしセルフケアを支援することについて学べた 訪問看護師の行動からリスクの予防の教育・指導が学べた 療養者や家族の強みをどのように看護に活かすのか、課題が見つかった場合、多職種がどのように連携してその療養者の自宅にあるものを使って援助を行う方法について学ぶことができた 限られた時間の中で効率的に行うことが大切だと分かった 実際の訪問場面の一連の流れを見て、訪問看護の様子を学ぶことができた 観察項目や援助方法、声掛けなどどのように実施するのかわかりやすかった 実際の療養者の生活の場と同じような場面が作られており、問題点や工夫されている点を観察により考え出しやすかったため 事例を通して本当に実習に行っているような状況で記録を書けたので臨地の想像がしやすかった 実際に同行しているような場面が多かったため 実際に看護師に同行しているようで想像できた
動画の解説が分かりやすく効果的だった(18)	映像を見ながらでイメージしやすく、解説がついていて自分とは違った考えも学べて視野が広がった 在宅看護ならではの視点やアセスメントをあらかじめ知ることができた 動画にアセスメントやケアのポイントが説明されていて、理解しやすかった どんな援助を行えばいいか、どういふところを観察したらよいかポイントがまとめられており大変参考になった 事例の解説が分かりやすく自分が気づけていない点も分かった 日々録の書き方やアセスメントをする上で着目すべき点
動画を自分のペースで視聴できた(10)	動画は何度も繰り返し見ることができたので、自分でわからないところをより深めることができた 看護師が行っている看護について動画を止めながら記録に整理することができた 自宅で視聴することができる
ペーパーバイシエントよりわかりやすい(3)	動画なので紙で見るだけより流れがつかみやすかった ペーパーバイシエントは自分の想像であり、グループワークをする時、お互いの考えが異なるから 動画の事例と内容が学びやすかったから
実習では体験する機会が少ないことも平等に学べた (2)	専門職の会議など、病院に実際に行かないと学べないことを学べたのが良かった カンファレンスなど、実際の臨地実習では参加が難しいと思われる場면을視聴できてよかった

### 3. 動画での事例を活用した実習での、学習を進めていくうえで困難だったこと

分類 ( ) 内は記載数を示す	学生の記述内容
タイムリーな質問ができなかった (23)	一人で学習を進めていて、分からないことがあったとき先生にすぐ聞くことができない 質問がしにくい 遠隔授業が始まったばかりの時は何をすればよいか全くわからなかった 課題の指示が不明確で、わかりにくいことがあった 記録のしかたがわからないことが多く不安だった 記録の書き方が適切か悩んだことがあった
事例の情報提供には限界がある(13)	実際に在宅へ行っていないため、家の構造など利用者を取り巻く環境についての把握が難しかった 動画ではどうしても見えない部分や情報が足りない部分があった、Sデータが分かりにくかった 事例であったため十分な情報がなく、目標などを考えるのが少し難しかった 療養者の住宅環境など分かりにくかった
通信量や手間がかかる(4)	Wi-Fiの環境がないと厳しい (動画を視聴するために)何回もログインする必要がある 動画がうまく再生されないことがあった
その他	実際に自分で援助を行っていないこと、動画事例で問題点が分かりやすかったことから、(臨地実習で)実践できるか不安がある 動画と現場は違うから



い」「リモート媒体での共有など他のやり方もあったのでは」「フェイスシールドを着けての話し合いは、距離があり、やりにくい」などがあった。その他、【グループワークの進め方】の回答が10、【教員の説明、対応】では9の回答があった。

## V 考察

### 1. 動画を使用した教材の効果と課題

1) 学生の臨地実習へのイメージトレーニングへの効果

動画を使用した教材により、ほぼ全員の学生が在宅看護の臨地実習へのイメージトレーニングに役立った又は少し役立ったと答えている。その要因として以下に4点述べる。

(1) 情報の獲得

表5. 学内実習のスケジュールや学習内容についての学生からの意見

#### 1. 良かった点

分類 ( ) 内は記載数を示す	学生の記述内容
グループワークで学びが深まった(50)	グループワークで、自分にはなかった視点を共有することができた、学びを深めることができた(17) グループワークをすることで様々な考えを共有し、新たなアセスメントや看護問題について考えることができて良かった グループワークとその解説によって、他者との意見のすり合わせができ、不足点・改善点が理解できた 少人数のグループであったためみんなの意見をきちんと聞くことができた、発言しやすかった(4)
課題の量や内容、スケジュールの組み合わせが適切だった(24)	課題の量が適量だった、ちょうど良かった(8) 課題のペースと指導の間隔がちょうどよかった 自宅学習の量が適切で、1つ1つの内容について学内で学習できたため分かりやすかった 自宅学習をすることで効率よい学習ができた 実習に行けない中でもできるだけ実習に近い形で学習を組んでもらえた
教員の説明、対応で学習が進められた(7)	学内日に自宅学習の内容について説明があったため、1人でも取り組むことができた 本日の学習内容についての細かい説明や前回のフィードバックがあった点 記録物のガイドラインを配布されたこと、書き方についての模範があったのでわかりやすかった
動画を取り入れたこと(6)	映像で在宅看護の視点を学べたこと 動画で実際の訪問時のイメージができた いろいろな事例を動画で学べた
実習記録用紙の活用により後半実習が進めやすくなる(3)	実習記録用紙に書いていったので記録用紙をどのように書くかわかった 学内演習で記録を書く機会があったので、臨地実習へ行ったときにスムーズに書けるため
感染予防対策ができていた(3)	ソーシャルディスタンスが保てる環境だったこと 通学の際の感染リスクが軽減できたこと

#### 2. 改善してほしい点

分類 ( ) 内は記載数を示す	学生の記述内容
課題の量や内容、スケジュール(17)	同時期の事例2つは難しい 他の事例でもいろいろな疾患のパターンで訪問看護師がどう対応しているのか学びたかった 1つの事例に多くの時間を使って深く考察するのはとてもいいが、もう少し圧縮して行っても問題ないと思う 学内グループの授業で説明があってから日々録やケース記録IVを書いたほうが書きやすかった 1コマだけのために学内に来るのが大変だった(6) 学内・遠隔の両方ある日が予定通りになかなかできなかった
感染予防対策(12)	感染リスクを考えるとできるだけ学内に来ない方がいいと思った グループワークは意見の共有のためにはいいが、もう少し少なくていい(三密状態の電車で大学まで来ることになるため) グループワークを遠隔にするといいいのでは、リモート媒体での共有など他のやり方もあったのでは フェイスシールドを着けての話し合いは、距離があり、やりにくい グループワークの話し合いは、声が遠くてスムーズにできなかった
グループワークの進め方(10)	グループワークの時間配分(長い、時間に対して内容が多い、発表の時間が長い など) 何度も学内でグループワークをする必要があまりわからなかった 円滑に進みにくかった
教員の説明、対応(9)	最初は自宅でも何をしたらいいのかわかりがなかった 自宅学習は分からないことがあってもすぐに聞けないので不便だった もっと具体的な指示がほしい。分からないことが多かった 自分で書いたことが正しいかわからないため個別の指導をしてほしい 自分の課題の進捗しか分からず不安だった



動画により映像や音声で視覚的・聴覚的に情報を得られることについて、学生からは「動画なので紙で見るだけより流れがつかみやすかった」という意見があり、看護学の演習で用いられることが多いペーパーペイシメントよりも事例についてイメージしやすかったものと考えられる。

## (2) 事例の選定

学生が初学者であることを踏まえ、複数の複雑な疾患を持つ事例は避け、疾患の経過や治療がシンプルで家族や環境との関連がわかりやすい事例を選定した。また、動画を視聴する前に、事例に関する基本的な情報（年齢、疾患や治療状況、要介護度、利用しているサービス等）を紙面で提示し、疾患や治療による生活への影響、看護の方向性等について事前学習したうえで動画を視聴したため、動画内で行われているケアの意味や目的を理解しやすかったのではないかと考える。さらに、動画事例に不足している情報を紙面に提供したことで、環境や家族関係、生活の様子を捉えやすく、生活者としての療養者と家族の全体像のアセスメントが進みやすかったと考えられる。

## (3) 看護の実践場面

動画の内容は実際の訪問看護の場面であり、看護師同士や多職種で行う会議の場面も含まれていた。渡辺ら（2011）<sup>4)</sup>は、「動画教材は実践場면을想定することを目的とし、臨場感があり、その場所における看護の全体の動きを視覚的に提示でき、一連の技術の流れをイメージ化できるものがよい」と述べている。動画が訪問看護の場面であったことで、学生が「実際に同行しているような場面が多かった」というように臨地実習に近い体験の学習をすることが出来た。さらに、「在宅での生活がどのように行われているのか、看護師はどんなところに着目して関わっているのか学べた」「療養者や家族への接し方、利用者の強みを活かしセルフケアを支援することについて学べた」「療養者の自宅にあるものを使って援助を行う方法について学べた」とあるように、個別性や環境に合わせて限られた資源の中でケアを提供する工夫、家族も含めた在宅看護の視点や役割について考え学ぶことができていた。また、動画には訪問看護後の報告・連絡・相談や退院時カンファレンス、担当者会議といった多職種連携の場面も含まれていた。そのような場面は、臨地実習で学

生が参加できる機会が限られており、全学生が経験できるものではない。学生からも「カンファレンスなど、実際の臨地実習では参加が難しいと思われる場面を視聴できてよかった」とあり、多職種連携の場面を映像で見て、その目的や、連携における看護師の役割について考え理解を深める機会をもつことができたことは動画教材の利点であったと考える。

## (4) 場面を振り返る解説

今回使用した動画には、訪問看護師の実践や連携についてポイントとなる場面を振り返りながら、音声と字幕による解説がつけられていた。学生からは「どんな援助を行えばいいか、どういうところを観察したらよいかポイントがまとめられており大変参考になった」「事例の解説が分かりやすく自分が気付けていない点も分かった」という意見があり、解説によって在宅看護における情報収集の視点やアセスメントの理解が補足されたと考えられる。

## 2) 繰り返し視聴できるシステムの効果

動画を使用した学習の特徴として、繰り返し何度も見て確認できること、自分のペースで視聴できることが挙げられ、効果的な学びに結びついていると考えられる。

## 3) 学生と教員で事例の情報を共有できることの効果

対象を捉える際に文字情報のみだと個々の捉え方によって多様なイメージとなりやすい。しかし、文字情報と動画を併用したことにより同一の事実として全員に共有され、観察の視点やアセスメント、訪問看護師の支援の目的、事例における看護師の役割などについて、グループワークや教員からの助言を受ける際のベースとなったと考えられる。「在宅看護の臨地実習は他の領域と異なり、教員が学生の訪問に同行する機会はほとんどなく、訪問している現場において、直接アドバイスすることが出来ない現状にある（仲根ら、2018）」<sup>5)</sup>とあるように、これまで本学の臨地実習でも学生が体験してきたことの聞き取りから指導が始まっていた。しかし、今回の学内実習では、動画の事例を用いることにより、学生と教員の間で利用者や家族、環境等について情報のすり合わせを行う時間を短縮することができ、すぐに内容に関しての指導を行うことができた。また、事前に教員が指導するポイントを共有することが出

来て、指導の統一を図ることができた。これらは実習目標の達成にもつながるものと考ええる。

#### 4) 動画の事例について実習記録を書くことの効果

学生の自由記述に「事例を通して本当に実習に行っているような状況で記録が書けたので臨地（実習）の想像がしやすかった」「記録の書き方が学べた」とあり、実際に自分が動画を見て得た情報を関連づけながら記録に書けたということは、訪問看護の視点で治療を含む生活状況や今後起こりうるリスクをアセスメントできたことでもある。

逆に「記録の仕方がわからないことが多く不安だった」「記録の書き方が適切か悩んだことがあった」という意見は、在宅看護の視点でアセスメントできているのかわからないということであり、「質問がしにくい」という回答もあることから、個別相談の時間を設けるなど対応する必要があると考ええる。

#### 5) 課題について

学生からの回答で多かったものは、【事例の情報不足】と【通信の問題】に関することである。【事例の情報不足】について、「実際に在宅へ行っていないため、家の構造など利用者を取り巻く環境についての把握が難しかった」、「動画ではどうしても見えない部分や情報が足りない部分があった」となどがあった。今回、動画の事例に不足していると思われる情報は教員が補足して紙面にて配布したが、特にSデータ（主観的情報：利用者の発言や思い）や住宅環境に関する情報が分かりにくかったという意見があった。また、動画教材は、学んでほしいことにフォーカスして作成されている。実際の訪問の場面では、多くの情報の中から意図的に必要な情報を収集する必要があるが、動画ではその情報収集力を養うことが難しい部分もあり、この点に関しては臨地実習で補っていく必要がある。

また、【通信の問題】については、「wi-fiの環境がないと厳しい」「動画がうまく再生されないことがあった」など、動画を視聴するための通信環境が整っていないことが挙げられた。学生によって通信環境に違いがあり、学習を進めるうえで影響を受ける場合もあるため、事前の確認や個別対応が必要である。

また、「動画と現場は違うから（イメージトレーニングにあまり役に立たなかった）」という回答があった。実際の訪問ではないことから生活の様子を

自分の五感を使って情報収集して確認するということはできなかったが、今回の学習では在宅看護の基本的な視点を理解して次の臨地実習に活かすことを目指していたため、ここでは課題としては取り上げないこととする。

## 2. 学内実習のスケジュールの妥当性と課題

アンケート結果で興味深かったのは、複数の項目が良かった点と改善してほしい点の両方に挙がっていたことである。

### 1) グループワークの活用について

学内実習では、例年の臨地実習で学生が体験してきたことに則って、臨地での実習と同じ記録用紙で、目標達成のために思考を組み立てやすくすることを意識した演習展開を行い、必ず個人ワークの後にグループワークでの共有の時間を取った。アンケート調査の結果では、学内実習の“良かった点”として50名の学生が【グループワークで学びが深まった】と回答している。理由としては、グループワークを通して問題点やリスクの明確化の共有ができ、視点の不足部分に気づき、視野の広がりを実感できたことが挙げられる。動画事例と共に不足している情報を提供したことで、環境や家族関係、生活の様子を捉えやすく、生活者としての療養者と家族の全体像のアセスメントがさらに進みやすかったと考えられる。また、教員はグループワークの進行状況を見守り、進め方や深めてほしい内容について助言するとともに、全体発表時に発表された内容について解説やフィードバックを行い、学生全員の理解を深められるよう関わった。このことにより、「さまざまな考えを共有し、新たなアセスメントや看護問題について考えることができて良かった」「グループワークとその解説により、不足点・改善点が理解できた」等の意見がみられた。真嶋<sup>6)</sup>は、「初学者は、自分の考えや正否がわからないことにより学習意欲が低下することがある。これについては、学習前後における自己の考えや模範解答との違いを振り返る、または他者の意見を聞くことにより、自身に不足している知識や認識に気づくことができる」と述べている。今回、実習期間の半分以上が遠隔実習であったため、学生が自分一人で学習を進めなければならない時間も長かったが、グループワークで他の学生の意見を聞き、教員からの解説を受けることで、自身の不足点に気づき追加・修正できる学内実習は効

果的であったと考えられる。実際に学生が記載した記録を読むと、グループワークを経て学習が深まっている部分が多い。

反面、“改善してほしい点”としても【グループワークの進め方】について挙げられており、「グループワークの時間が長かった」「発表時間が長かった」「何度も学内でグループワークをする必要があまりわからなかった」と、グループワークや全体発表の時間配分について1割弱の学生が改善を求めている。グループや個人により差がみられたこともあり、グループワークの目的に関して、より分かりやすい説明の工夫が必要であったと考える。また、その日の学習目的を理解し自分で学習を進められる学生にとっては、グループワークの時間をコンパクトにして、もっと他の学習に進みたいという希望もあったのではないかと考えられる。ほかに「(グループワークが)円滑に進みにくかった」という意見もあり、アイスブレイクなどを取り入れた話しやすい環境への配慮や、グループワークの進捗状況を見極めて、教員がタイムリーかつ効果的にサポートできるように、教員間の情報共有の強化と学生の意見を引き出すファシリテーション力の向上が課題と考える。

## 2) 学内実習のスケジュールについて

“良かった点”として次に多かった【課題の量や内容、スケジュール】は、“改善してほしい点”としては最も多く挙げられたものでもあった。良かった点として「本日の学習内容についての細かい説明や前回のフィードバックがあった点」「学内日に自宅学習の内容について説明があったため、1人でも取り組むことができた」という意見があり、大学での対面学習の際に次回の遠隔学習時の実習目標や内容の説明を行ったことにより学生が個人でも実習に取り組めたと考える。また、ほかにも「記録物のガイドラインを配布されたこと」「書き方についての模範があったのでわかりやすかった」と、モデル用紙の配布は遠隔学習を行う学生にとって有効であったと考えられる。さらに、「実習記録用紙に書いていったので記録用紙をどのように書くかわかった」「学内演習で記録を書く機会があったので、臨地実習へ行ったときにスムーズに書ける」という意見もあった。

一方で、「最初は自宅で何をしたらいいのか理解ができなかった」「もっと具体的な指示がほしい。

分からないことが多かった」「自宅学習は分からないことがあってもすぐに聞けないので不便だった」という意見もみられた。学生によっては、遠隔実習では教員の直接的な指導が得られない中で、すぐに質問することができない、どこに質問したらよいかわからないという状況で学習がスムーズに進まなかったこともあるのではないかと考えられる。そのため、Webシステム上での質問以外にも電話での質問時間を明示するなど、学生がタイムリーに問題解決できるような仕組みが必要であったと考える。また、モデル用紙をもとに自己学習し作成した実習記録を登校日のグループワークで追加・修正するようプログラムを組んでいたが、「自分の課題の進捗しか分からず不安だった」「自分で書いたことが正しいか分からないため個別の指導をしてほしい」という意見もあるように、個別指導により個々の進捗状況の把握や学習についての悩みを相談できる機会を設けることについても検討していく必要がある。

## VI おわりに

今回、新型コロナウイルス感染拡大のために臨地での実習時間が少なくなっている状況下で、感染リスクを減らし且つ実習目標を達成するために、遠隔実習と学内実習を組み合わせた動画を用了形態で45時間の実習を行った。学生のアンケート結果をもとに実習を振り返った結果、以下の4つの効果と課題が明らかになった。

1. 遠隔学習と対面学習の組み合わせに関しては、感染状況に左右されるので臨機応変な対応が求められるが、今回有効であった動画と紙面情報の同時提供、在宅看護の視点が書かれた記録のモデル用紙を使用することで、遠隔実習でもある程度の個人学習を進めることができた。
2. 学生のレディネスに適した動画事例を選定し、教員間で内容やポイントを共有して指導を行うことで、実習目標達成に必要な最低限の実習体験とアセスメントの視点を担保することができた。
3. 遠隔実習で動画視聴や実習記録の作成を行い、学びの共有としてグループワークや全体発表を行ったことで、自己の課題の明確化につながった。
4. 課題として、学生によって理解度が異なるため、質問できる時間の提示や進捗状況に応じた対応の検討、学習効果を高めるための動画事例に不



足する情報の提示，学生の通信環境に応じた個別対応等が挙げられた。

新型コロナウイルス感染症拡大が終息し臨地実習時間の制限がなくなるまでの間は，学生が在宅看護への理解を深められるよう，今回明らかになった教育方法の効果を活かし，課題については改善を重ねていきたい。ただし，臨地実習時間が確保できる場合であっても，準備学習の中で動画を用いた演習を取り入れ，臨地実習での学習効果を高めていきたいと考える。

本研究における利益相反は存在しない。

### 文献

- 1) 文部科学省ホームページ：[https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) [2020.07.03閲覧]
- 2) 文部科学省ホームページ：[https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) [2020.07.03閲覧]
- 3) 真嶋由貴恵：eラーニングは看護教育の抱える問題をどう解決するか．看護教育，55（2）：96-101，2014.
- 4) 渡辺美奈，山本洋行，脇本寛子，他：ユニフィケーションによる看護実践能力向上に有用な視聴覚教材に関する文献的考察．名古屋市立大学看護学部紀要：第10巻，9-32，2011.
- 5) 仲根よし子，荒木章裕，伊藤智子：訪問看護ステーションにおける実習経験の実態調査（第一報）－施設規模別にみた学生の在宅看護実習経験の差異－．医療保健学研究，9号，3-32，2018.
- 6) 前掲書3)

(令和3年1月6日受理)



A report on educational methods in on-campus training using videos  
due to reduction in the on-site nursing practical training time:  
Analysis of students' responses to questionnaire  
in home care nursing practical training

Yuko YAMAGUCHI, Mika MURASE, Kayo MATSUMOTO  
Naoko OGATA, Kiyomi TANAKA

Abstract

The spread of the novel coronavirus curtailed the time spent in on-site nursing practical training. Under these circumstances, we conducted remote and face-to-face on-campus training for 111 third-year students in the Department of Nursing of our university using videos of home-visit nursing cases. The aim of this training was to provide students with the point of view of home care nursing. We administered a questionnaire to the students to clarify the effects and challenges of educational methods using videos. The results revealed that more than 90% of students found watching videos was useful at least for image training in preparation for on-site practical training. By sharing information using videos, students were able to easily imagine the case and grasp the physical, psychological, and social aspects of home care visit, which allowed them to increase their understanding of patients. Furthermore, group work allowed students to share their views on comprehensive assessments and corresponding support based on lifestyle and environment, while mutual awareness among the students appeared to deepen the learning of home care nursing's point of view. The challenges mentioned by students included how to ask questions in a timely manner, how to respond based on the student's progress, the presentation of information that was lacking in the video cases, and providing support in accordance to students' internet facilities.

Keywords: home care nursing, video, remote, on-campus training, educational methods